

言葉から実践へ

——森鷗外晩年における「考証」の概念規定

多田伊織

森鷗外は考証学に対して、どのような態度を取っていたのか。この疑問に答えるために、本論では、筆者が普段から親しんでいる考証学の方法を援用した。テキストを集め、関連する記述を抜き出し、時系列で比較し、異同を検討するやり方である。この作業から浮かび上がるのは、従来形成されてきた「鷗外像」とは異なった鷗外の姿である。

大正6年、森鷗外は健康は損なわれつつあった。鷗外は55歳を迎えた前年4月に陸軍を予備役となり退官したが、それに先んじて、同年の正月から東京日日新聞の客員として、東京日日・大阪毎日新聞紙上に連日いわゆる史伝小説を書き継いでいた。軍を辞めた後の鷗外の身の振り方は退官前から話題となっていて、医学大学予科以来の友人、青山胤道も、鷗外に今後を質した一人である。斎藤茂吉は、鷗外の次のような言葉を書き残している。¹

一、青山胤通博士との交遊を語られた、「青山君に就いて」といふ談話の中に次の如きことがあった。「澁江抽齋」等の史傳ものと関係があり興味深いので載せ置く。

おれが陸軍を罷めてから、日刊新聞に筆を執るといふのを聞いて、青山君は何か興味のあるものを書くかと思つてみると、澁江抽齋だか伊澤蘭軒だかの傳を書くので、會ふ度に、「詰まらないものを書くではないか」というた。おれがかういふ風なものを書くのは、従来考證學者の傳記の纏まったものが無いから、それで筆を執り始めたのだが、青山君と同様の非難は随分諸處から聞かされて居るけれども、その理由を説明するも詰らぬと思つて、今迄人にも話さず、親友たる青山君にも黙つて居つた。

青山のいう「詰まらないもの」を書くために、鷗外は身を削つた。先妻赤松登志子の子である鷗外の長男於菟は、その頃の有様を、次のように述懐している。

父の健康を周囲のものが心配した最初は陸軍を退いた大正五年五十五歳の時で、毎日の運動不足を気づいたのであった。その前年の末から大阪毎日新聞社に寄稿することが時々あったのを、この時から正式に社の客員に聘せられて大阪毎日、東京日日の両紙に連載される読み物を寄せる約束が成立した。「澁江抽齋」「伊澤蘭軒」「北条

1 斎藤茂吉『澁江抽齋』後記、岩波版全集、昭和26-31年版。

霞亭」などの伝記であるが、その微細にわたる考証の文章は当時の読者を飽かしめ、しかも新聞社は一日の休載をも快く許さなかった²ので、運動不足と精神過労の結果、父の形容に老衰が見えてきた。

かつて実年齢を偽って、12歳の時に14歳として現在の東大医学部の進学準備の課程に入学した鷗外は頑健な身体を持ち主で、齢50を超えた頃になっても、年よりは若く見られていた。勁く、知力人の並ぶなく、家族を分け隔てなく愛する自慢の父が、俄に老いを見せ始めた。息子であり、法医学者である於菟は、暫時の休載も許さず、馬車馬のように働かせる新聞社のやり方に、武官を退き文人として生きようとした鷗外その人の価値よりも自社の利潤追求を第一とするあくどさを覚えて憤然とした。確かにこの間断なき3年ほどの史伝執筆は、老境にさしかかった鷗外の健康を蝕んでいた。於菟は続ける。

大正六年十二月末に皇室博物館総長兼図書頭に任ぜられて参館と参寮とを隔日に行う毎日の出勤と、仕事が好みに合いかつ張合いのあるものなのでまた元気を回復した³。

文官としての再就職は、名誉職へのものであり、家に籠もって連載小説の執筆を専一とする生活から脱した鷗外は、ひとまず生氣を取り戻した。

老後の仕事として鷗外が撰んだいわゆる史伝は、時好に合わなかった。青山胤道が「詰まらないもの」と難じ危ぶんだのは間違っていなかった。於菟は「微細にわたる考証の文章は当時の読者を飽かしめ」たと評している。毎日大量の漢文、それも多くが訓点を施されない白文で、あたかも「読めない者が無教養」といった態度で続けられる連載は、手元に漢文の文法書も漢和辞典も置かない一般読者には反発を受けていた。読者はどんどん置いてけぼりを食らわされるのだが、鷗外はそれを顧みなかった。鷗外が、東京日日・大阪毎日新聞両紙上で、大小の史伝小説を書き綴った中には、後に史伝三部作と呼ばれることとなる『澁江抽齋』『伊澤蘭軒』『北條霞亭』が含まれている。

鷗外の一連のいわゆる史伝小説は難しい。近年、『鷗外歴史小説集』として、岩波書店が注釈本を出版し、少しは一般の読者にも読みやすくなったのではあるが、この注釈とて、現代の専門家何人もの手を煩わせて成った代物である。注釈つきでなければ到底読めない小説を、鷗外は新聞紙上で連載したのである。

当然ながら、読者の評判は芳しくなかった。しかし、負けず嫌いな鷗外は、『伊澤蘭軒』の末尾で、読者から寄せられた批判を次のように一蹴する。

2 森於菟『父親としての森鷗外』ちくま文庫、1993年、318頁。初出は『世界』昭和30年4月「父鷗外の死について」。

3 同上。

蘭軒傳の世に容れられぬは、獨り文が長くして人を倦ましめた故では無い。實はその往事を語るが故である。歴史なるが故である。人は或は此篇の考證を事としたのを、人に厭はれた所以だと謂つてゐる。しかし若し考證の煩を厭ふならば、其人はこれを藐視して已むべきで、これを嫉視するに至るべきでは無い。(略)

わたくしの澁江抽齋、伊澤蘭軒等を傳したのが、常識なきの致す所だと云ふことは、必ずや彼書牘の言の如くであらう。そしてわたくしは常識なきがために、初より読者の心理状態を閑却したのであらう。しかしわたくしは學殖なきを憂ふる。常識なきを憂へない。天下は常識に富める人の多きに堪へない。⁴

「わたくしは學殖なきを憂ふる。常識なきを憂へない」とまで言われては、読者の立場がない。新聞連載小説という形式と、鷗外という人物は、そもそも相性がよろしくなかったようである。鷗外の小説で販売を上げようとした新聞社の目論見は外れ、帝室博物館総長兼図書頭に任ぜられたのを潮に、鷗外は『北條霞亭』の連載を途中で切り上げた。

1 鷗外と「史伝」

「史伝」が鷗外晩年の特定の歴史小説群を指すのではなく、明治以降の一般的なジャンル呼称であることを雑誌の投稿欄等の分析によって指摘されたのは、目野由希氏であるが⁵、史伝という名称は、鷗外がいわゆる「史伝」で書き記そうとした、江戸医学館を活動の一つの中心とする江戸後期から幕末の医師・考証学者たちには馴染みの名称であった。鷗外がいわゆる「史伝」執筆の参考のために求めたと思われる資料の一つに、『躋壽館醫籍備考』がある。躋壽館とは、江戸医学館の別称であり、慶応4年8月(明治改元は9月)に廃された。『躋壽館醫籍備考』は、江戸医学館所蔵の図書目録に基づき、明治維新後、旧幕府医官の岡田昌春・高島祐啓が解題を付したもので、明治10年1月31日に出版された。鷗外の手元にあったのはこの排印本で、現在、東大の鷗外文庫に収められている。医学館蔵書は、『躋壽館醫籍備考』出版当時、既に散逸していた。往時の蔵書の豊富さを後世に伝えるために、浅田宗伯が岡田昌春・高島祐啓に勧めて『躋壽館醫籍備考』を編纂させたのである。この目録は全部で7巻からなり、巻之一から六までに記されるのは、『黄帝内経』を始めとする専門的な医書だが、最後の巻之七は、さまざまな医学関係の書物がまとめられている。そのジャンルの一つが「史伝」である。「史伝類」に収められているのは、

『史記』扁鵲倉公伝一卷一冊 三種

『医史』十卷二冊 抄本 明・李濂撰

4 『伊澤蘭軒』その三百七十一。

5 目野由希『明治三十一年から始まる『鷗外史伝』』溪水社、2003年。

『献徴医録』二卷二冊 明・焦竑撰（『国朝献徴録』百二十卷から抄出）

『医術列伝』十四卷十四冊（『欽定古今圖書集成』博物彙編芸術典第五二四～五三七卷から抄出）

の6部29巻22冊で、いずれも、「名医伝」といった趣の書物だ。江戸医学館の幕府医官の多くは、医師であると同時に考証学者でもあるから、左国史漢はお手の物、当然史伝という術語の出典は自家葉籠中のものである。彼らはためらいなく、名医伝を「史伝部」に繰り入れた。

『躋壽館醫籍備考』史伝部の如く、ある職域の人々の伝を集めたものを「史伝」と称する例では、仏家では隋の費長房『歴代三宝記』巻第十五自序で、

其外、傍採隱居・歴年・國志・典墳・僧祐集記・諸史傳等僅數十家。

（其の外、傍らに隱居・歴年・國志・典墳・僧祐集記・諸史傳等僅か數十家を採用。）

というのが早い。ここでいう「諸史傳」とは、伝統的な中国の史書も含まれるが、それは時代を示す帝王の繫年作りに使われるのが殆どで、それ以外の内典、すなわち仏典の経録や僧尼の伝、ここに別記されている梁・僧祐の『出三蔵記集』も史伝の部類であろう。この当時の経録は、訳出年代ごとに仏典を並べ、時には訳出者の簡単な伝が付されていた。経録は中国仏教年代記をも兼ねていたのである。

「史伝」という呼称は、明治維新後設置された「博物館」の展示にも見られる。明治13年12月に刊行された『博物館列品目録 史傳部・軍事部』（博物館刊）の序には次のようにいう。

當館ニ於テ史傳部ト言フハ何ゾ。史傳ハ開闢ヨリ以來、近世ニ至ルマテ、史冊ニ傳フル所ノ、歴世制度ノ沿革、法教、文物ノ盛衰、風俗ノ變更等ヲ、品物ニ從テ考テ證シ、形狀ニ從テ啓クベキモノヲ陳列シテ、以テ知識ヲ弘ムルノ資トスルガ故ナリ。（一部、句読点を改めた）

いまならば「歴史部」というべきところを「史傳部」と名付けているのだ。

僧尼の伝や仏教史にまつわる仏典を「史伝部」として組み入れるのは、大正13年から刊行が始まる『大正新脩大藏經』が有名だが、大正2年刊行の『真宗全書』も「史伝部」を立てている。

少なくとも明治10年代から「史伝」の語は、あるいは歴史の意味で、あるいは特定の職域の人々の伝を集めたものとして使われていた。江戸医学館にまつわる人物の伝を「史伝」と称するのは、鷗外が名付けたものではなかったとしても、一定程度の学識を持つ人々の間には、妥当な名称だと認識されていただろう。

鷗外没後、さまざまな追悼特集が編まれた。かつての論敵坪内逍遙は、鷗外の初七日に

次のように書いている。

君は官邊の用務が忙しくなったためか、何かの理由で文壇と交渉するのが厭になったためか、もう約十年近くだんだん文壇とは疎遠になっていったが、例の『伊澤蘭軒』などから推測し、また時々仄聞した所から推して、多分將來の君の努力は新時代式の考證學的のものか、『伊澤蘭軒』式の精緻な史傳類に結晶するものであらうと思つてゐたのに、其成績が公けにならんうちになくなったのは、くれぐれも惜しいことであつた。⁶

逍遙のいう「『伊澤蘭軒』式の精緻な史傳類」は、鷗外晩年のいわゆる「史伝」を指している。

目野由希氏が指摘するように、史伝の語は、歴史伝記小説の類に使われるのだが、鷗外がいわゆる「史伝」を毎日新聞紙上に連載しているのと時を同じくして、明治・大正・昭和に渡って文学・評論・研究の分野で縦横に活躍した幸田露伴が、暫時の沈黙を破り、中国出典の、伝記というよりは伝奇と称した方が適切な観のある小説を発表し始めた。大正4年7月から6年7月にかけて発表された短編は、8年3月に『幽情記』（大倉書店）としてまとめられた。そして翌月、『改造』大正8年4月号誌上に、斯界を驚かせ、露伴の文壇への復帰を高らかに告げる「運命」が発表されるのである。

逍遙が「『伊澤蘭軒』式の精緻な史傳類」と書いたとき、すでに露伴の「運命」は世に出ていた。後になるが、戦時下の昭和18年、中央公論社は『幸田露伴史傳小説集』全4巻の出版を企画した。結果的に、2巻までを出版したところで終わったこの企画は、第1巻は「頼朝」「武田信玄」「今川義元」、第2巻は「幽情記」「暴風裏花」「太公望」「楊貴妃と香」「怪談」、第3巻は「運命」「魔法修業者」「成吉思汗」、第4巻は「為朝」「蒲生氏郷」他一篇を収める予定であった。「史伝」はなにも鷗外だけのものではなかったのである。そして、鷗外露伴二人の同時期の作品を華々しさからいうならば、『北條霞亭』よりは、人は「運命」を推すであろう。

恐らく、鷗外が『北條霞亭』で史伝の筆を止めるのは、陸軍退官後の筆すさびに選んだいわゆる「史伝」を書き続けるのには、困難が伴ったからであろう。一つには学識の不足であり、もう一つには、中国学、考証学の分野に突然土足で踏み込んできた鷗外に対する、露伴の「反発」とも見える中国出典の伝奇類への恐れからである。貧困のため学資が続かずに、正規の学校では学べず、ほぼ独学でその文業を築いた、かつての盟友露伴の恐ろしさ、中国学の実力は、鷗外がよく知っている。

鷗外は、端から負ける戦はしない男である。形勢不利とみると、身を考証学に転じた。史伝を武器として、正面から露伴と戦うための体力は鷗外の体からすでに失われつつあった。

6 大正11年7月15日稿。坪内逍遙「森鷗外君を思ふ」『鷗外全集』月報一、第1巻第2期、1986年。

考証学のやり方は、いわゆる「史伝」執筆の際に学んだ。帝室博物館総長兼図書頭として、所蔵の書籍に関する考証を進めるのは、立派な職務の一つではないか。逍遙が、追悼文で指摘した「新時代式の考証學的のもの」が、「ゆるやかな史伝からの撤退」を計った鷗外の最後の仕事になっていくのである。

2 鷗外と結核

大正11年7月9日、森鷗外は病のため、世を去った。死因は萎縮腎と発表されたが、33回忌を期して、長男於菟が主たる死因は肺結核だったと明かした。

昭和二十九年七月九日父（森鷗外）の三三回忌に、（略）その朝早くラジオ東京と日本文化と二つの放送局から相ついで私の声が流れた。両方とも前後して数日前に父の追憶の話を頼まれ、それぞれの局に行つて十分間ほどずつ録音したものであった。その中での一つは私から見た父の生涯の健康状態についての観察を述べたので、話の要点は「鷗外の死は世間一般に信ぜられているように萎縮腎のみによるのではない。腎臓も侵されていたがそれは直接に死の原因となる程度ではなく、主因は肺結核、それも壮年時代から長くひそんでいた結核病巣の老年に至って活動化したことであつた。」というのである。

（略）このことを隠していたのではなく、このときまで私はまったく知らなかったのである。父の事蹟を忠実に記録したのは父の末弟なる森潤三郎であるが彼も真実を知らなかったので、その後の伝記の誤りはすべてこれに端を発しているといつてよい。私にこれを語つたのは父の死床における主治医額田晋博士である。（略）

私が東邦大学の教授となつた年、夏休暇前と思うが「いつか君にいつて置こうと思つてたのだが」と前置きして額田君は話し出した。「鷗外さんはすべての医師に自分の身体も体液も見せなかつた。ぼくだけに許したので、その尿には相当進んだ萎縮腎の徴候が歴然とあつたが、それよりも驚いたのは喀痰で、顕微鏡で調べると結核菌が一ぱい、まるでその純培養を見るようであつた。鷗外さんはそのとき、これで君に皆わかつたと思うが、このことだけは人に言つてくれるな、子供もまだ小さいからと頼まれた。それで二つある病気の中で腎臓の方を主として診断書を書いたので、真実を知つたのはぼくと賀古（鶴所）翁、それに鷗外さんの妹婿小金井良精博士だけと思ふ。もっとも奥さんに平常のことをきいたとき、よほど前から痰を吐いた紙を集めて、鷗外さんが自分で庭の隅へ行つて焼いていたと言われたから、奥さんは察していられたかも知れない」⁷。

鷗外死去当時、結核は死病だった。現在でも治療を怠れば死を招く。1881年にドイツ

7 森於菟『父親としての森鷗外』309-311頁。

のロベルト・コッホが結核菌を発見していたものの、この頃は未だ根本的な治療方法が見いだされておらず、怪しげな民間療法が幅を利かせていた。⁸ 空気の澄んだ高地や温暖な気候の海岸沿いの土地で静養するサナトリウム療法が改良を重ね、日本に浸透し始めたのがこの時期である。⁹ 公務をこなす鷗外には、サナトリウムで静養する暇などなかった。

それだけではない。結核は遺伝するという誤った観念が世間には広くはびこっていた。「肺病筋」という言葉がそれを今に伝える。結核の疑いがあるというだけで、結核患者とその家族は、激しい偏見と差別に曝された。まだ幼い子女のいた鷗外は、先に逝く父の結核のせいで、我が子や妻が社会から爪弾きに遭うことを極端に恐れ、結核罹患を徹底的に世に知られぬように計らった。

ただ、鷗外が結核による死を隠そうとしたのは、遺される家族のためだけではなくかも知れない。鷗外は、体面を重んじすぎる男である。衛生学を陸軍に導入するためにドイツ留学に派遣された鷗外が、感染症の最たる病結核で命を落とすのは、これまで営々と築き上げてきた全ての榮譽に泥を塗る、恥ずべき事実である。鷗外は、ドイツで、結核菌の発見者コッホに師事した。コッホの弟子、日本衛生学の先駆者が、よりによって結核で命を落とすとは。好奇の目が鷗外やその家族に注がれることは必至であろう。鷗外健康は急速に衰えて行ったが、職務を先行し、静養さえ満足に取らなかった。

鷗外を看取った額田晋が「驚いたのは喀痰で、顕微鏡で調べると結核菌が一ぱい、まるでその純培養を見るようであった」と語った状態は、まさに鷗外に於ける衛生学の不在を意味する。純培養とは、不純物が混入しないように注意を払って、一種類の細菌や黴だけを培養することである。本来、喀痰には、何種類もの菌が存在しているのが普通だ。それが顕微鏡で検体のどこを観察してみても、純培養かと思ふほど大量の結核菌を含んでいたのだ。この喀痰の状態が意味するのは、鷗外が結核菌を排出する開放性結核になっていて、それも手の施しようもない段階まで進んでいた、という事実である。

「純培養かと思ふ」排菌量の喀痰は、結核菌の排出度合いを示す「ガフキー数」では、最悪の「ガフキー 10 号」に当たる。ガフキー数は、喀痰標本を 500 倍に拡大して顕微鏡で観察、確認できた結核菌の数に従って、まったく菌のない陰性の 0 号から最大の 10 号までを 11 段階に分類したものである。一つの視野に結核菌 1 個を認めるのが 3 号で、ガフキー 3 号以上になると、患者の痰 1cc 当たり数万個の結核菌が存在する計算となる。鷗外は戯曲『仮面』で、結核菌検査について、結核の疑いで喀痰検査の結果を聞きに来た学生に向かって、主人公の「博士」に次のように言わせている。

博士 先にその寫眞と標本に張ってある札紙とを見給へ。寫眞には千八百九十二年十月二十四日の日附がある。標本には昨日の日附がある。それから標本を見給へ。細菌が見えるだらう。その絲を刻んでば蒔いたやうなのが結核菌だ。青い地に菌が赤く出

8 福田真人『結核という文化——病の比較文化史』中公新書、2001年、139-48頁。

9 同書、198-213頁。

てゐる。Ziehl Neelsen の法といふので、今は大抵これで染める。君はその寫眞の結核菌を誰のだと思ふ。そりゃあおれのだ。¹⁰

結核菌とそれを染色する Ziehl Neelsen 法について、松田道雄は次のように説明している。

結核菌 コッホによって発見され彼の名を冠して呼ばれる結核菌の病原體、結核菌は細長い桿のような形態をした最近で自分で運動はしない。長さは〇・〇〇二耗乃至〇・〇〇四耗（赤血球の直径の四分の一乃至半分）幅は〇・〇〇〇三耗くらゐである。酸とアルコールとに對して特に強い抵抗をもつてゐるのが特徴である。他の細菌は一たん染色されても鑛酸の中に浸すと容易に脱色するが結核菌は脱色しない、現在一ばんよく用ひられてゐるチール・ネールセン氏染色法はこの性質を利用してゐる。（略）この染色は數分間に終る簡単なものである。結核菌はフクシンの色をとって赤く、他の細菌や細胞はメチレン青で青く染まるから容易に菌をさがせる。¹¹

鷗外が書くように「絲を刻んでばら蒔いたやう」な結核菌像が見られるのだとすれば、ガフキー 6 号か 7 号くらいに相当する。この学生は明らかに開放性結核患者であるばかりでなく、排菌量も相当だとわかる。

近年は結核感染の判定にガフキー数は使用されなくなりつつあるとはいえ、現在でも「ガフキー 10 号」と判明すれば、即時隔離入院措置を取るだけでなく、可及的速やかにそれまでに患者に接触した可能性のある人々が結核に感染していないかを徹底的に検査し、感染が見つければ治療をすぐに開始する。ところで、結核菌というのは極めて見つかりにくい病原体であり、増殖のスピードが遅いことで知られている。最重症の「ガフキー 10 号」でも、一般的にはまだ「絲を刻んでばら蒔いたやう」な状態の「絲」の塊が多くなっている状態だ。赤い糸は、細長い結核菌がフクシンに染まった姿である。ところが、額田晋が見た鷗外の喀痰から採取した塗抹標本は、もはや「絲を刻んでばら蒔いた」とか「青い地に菌が赤く出」るなどという状態を超えていた。鷗外の標本は、患者の喀痰から得た結核菌を普通ならば数週間から 2 ヶ月掛けて培養して得られる純培養の標本と見まごうほどであった。純培養では標本全体が隙間なく赤く染まり「全面真っ赤」に見える。ここまで放置された患者の治療には、抗生物質が使用できる現在であっても、比較的時間を要するだけでなく、患者は生命の危機に曝されている。

いくら鷗外が痰を紙に包んで庭で焼却しようとも、開放性結核の患者から周囲への感染を防ぐのには限度がある。結核は、「空気感染」すなわち飛沫核感染する感染症であり、感染力は強い。鷗外は、自らの症状を自覚しつつ、病巣からただならぬ量の結核菌を排出し、それを無警戒な周囲の人々にばらまいて暮らしていたのだ。集団感染が起きなかった

10 明治 42 年（1909）4 月 1 日発行、雑誌『昂』4 月号初出。『鷗外全集』第 4 卷に依る。

11 松田道雄『結核』弘文堂、昭和 15 年、6-7 頁。

のが不思議なくらいである。

当然ながら、「萎縮腎」という診断にも疑問の目が向けられる。結核菌が冒すのは、肺だけではないからだ。結核の進み方から察して、恐らく、鷗外の「萎縮腎」とは「腎結核」によるものだっただろう。青年期に鷗外に巣食った結核菌は、長い時を経て、身体のあちこちを蝕んでいたのである。

鷗外が帝室博物館総長兼図書頭に任ぜられたのは大正6年12月であったが、その翌々年の8年3月には「結核予防法」が制定され、次のように定められている。

第四条 行政官庁ハ結核予防上必要ト認ムルトキハ左ノ事項ヲ行フコトヲ得

- 一 業態上病毒伝播ノ虞アル職業ニ従事スル者又ハ病毒蔓延ノ虞アル場所ニ居住シ若ハ其ノ場所ニ於テ職業ニ従事スル者ニ対シ健康診断ヲ施行スルコト
- 二 結核患者ニ対シ業態上病毒伝播ノ虞アル職業ニ従事スルヲ禁止スルコト

開放性結核であった鷗外は、この法律の適用を受けて嚴重に管理されねばならない結核患者に該当する。健康診断を受け、「業態上病毒伝播ノ虞アル職業ニ従事スルヲ禁止」される筈の重症患者であったのだ。鷗外は世間から隔離されねばならない、他に危険を及ぼす怖れのある存在だった。コッホに師事し、衛生学を修めた鷗外は、感染症管理には人一倍敏感だろう。「結核予防法」のこの規定を知らぬはずがない。むしろそれ故に、帝室博物館総長兼図書頭であり、医師であるという特権を利用して、鷗外は死の直前まで他の医師による診察を拒み、結核罹患を隠し通そうとしたのであろう。

抗生物質によって、結核を根治できるようになった現在でも、開放性結核患者は隔離入院の対象となる。極めて排菌量の多い「ガフキー10号」に相当する重症であることを鷗外は押し隠して、貴顕に接し、内外の賓客をもてなすの機会の多い、帝室博物館総長兼図書頭の勤務をこなしていたのである。病を自覚した上で、感染症を放置し、他人に感染させかねない危険を冒し続けたのは、医師として当然守らねばならない職業倫理に反する愚挙である。そこまでして、鷗外が護りたかったのは、やはり家族よりも、名誉であろう。己の名誉は、他人の命を脅かしてまでも護られて然るべきであると、鷗外は考えていたことになる。無責任という批判すら、生ぬるい。

「肺と腎臓を冒された結核による死」の隠蔽をはかった鷗外は、結核と同様に死病ではあるものの、老人の病と認知されていた萎縮腎を死因として発表させるように手を回した。腎結核であることは隠された。鷗外の主治医額田晋に「これで君に皆わかったと思う」と語った「皆わかった」とは、「肺結核」だけではなく「腎結核」をも指すのだろう。もし、単なる老人性の萎縮腎だったならば、これは周囲には感染しない。萎縮腎で死んだと言えば、少なくとも家族に結核の累は及ばない筈である。鷗外の父静男は萎縮腎で世を去っている。子も同じ病に斃れるとなれば、世間は萎縮腎が死因であると十分に納得するだろう。

鷗外の死因は秘された。先に於菟が書いていたように、弟潤三郎にも、それは知らされなかった。潤三郎の著『鷗外森林太郎傳』は次のように記す。

兄は前年（引用者注 大正10年）秋頃から時々下肢に浮腫があり、家族は腎臓病ではないかとの疑を抱いて尿の検査を薦めたが、医者診察は絶対に受けぬ主義を固執して、相変らず博物館と図書館に出勤していたが、今年春流行性感冒に罹り、それがこぢれて癒えず、六月十五日から引籠り、賀古氏の切なる勧告で漸く検尿をおこなひ、その結果は蛋白中程度にして多少の円柱を認められた。二十九日漸く医学博士額田晋氏の診察を受け、且今後の処置を一切同氏に任せた。診察の結果委縮腎にして証状顕著、稍重症、身体の衰弱著しく、顔面及び四肢に軽度の浮腫あり、心臓衰弱の徴ありといふ事であった。七月六日症状増悪し、衰弱益加はり、脈搏頻数時時結滞するも意識は尚明瞭で、遺言を口授して賀古氏が筆記した。¹²

上記に登場する人物の内、鷗外の死の真相を知っていたのは、主治医額田晋と賀古氏こと賀古鶴所である。遺言を口授された賀古鶴所は鷗外の医学校時代からの親友である。弟の潤三郎は文系に進み、医師ではなかった。身内の書いた評伝ということもあり、『鷗外森林太郎傳』は信頼が厚く、鷗外研究の基礎資料の一つとなっている。身内の証言だからなおのこと、『鷗外森林太郎傳』の鷗外委縮腎死亡説は長く疑われることがなかった。このように、鷗外は血を分けた肉親をも騙しおおせたのである。

その上で、鷗外は周到にも、自作の中に誤解を誘う罫を仕掛けた。いわゆる「史伝」三部作の掉尾を飾る『北條霞亭』はその「読みにくさ」と「主人公北條霞亭の人間的魅力の欠如」で悪名高い。何故、鷗外はこの詰まらぬ男を顕彰する作品の完成に執着したのか。その回答の一つとされるのが、霞亭の死因である。霞亭は萎縮腎か脚気で亡くなった、とされる。萎縮腎も結核同様、進行する死病である。自らに萎縮腎の徴候を認めた鷗外は死の影に脅かされつつ同病相憐れみ、さしたる偉人とも見えない霞亭の伝を気力を振り絞って完成させたのではないか。そのような説は割合に早くから行われている。たとえば石川淳は、真珠湾攻撃の3日前に刊行された『森鷗外』の中で、次のように述べる。

前述のとおり、「霞亭生涯の末一年」が完結したのは、アララギ大正十年十一月号である。そして、その時分から、鷗外自身ときどき下肢に浮腫を生じ、次第に衰弱し、腎臓病の徴をあらわすに至ったと伝えられる。翌十一年六月、額田博士に依って萎縮腎と診断を下された死の病である。上掲の数節を書いていたとき（引用者注「霞亭生涯の末一年」の霞亭の死因に関する叙述部分）、おそらく鷗外は自分の身に於て自分の身を顧慮していたのであろう。ひそかに「死の己に薄るを暁」っていたのであろう。霞亭追及の末に、鷗外が不幸にもつかみえたものの一つは自分の肉体の疾患であった。¹³

12 森潤三郎『鷗外森林太郎傳』丸井書店、昭和17年4月、163頁。

13 石川淳「鷗外覚書」『森鷗外』岩波文庫所収、32頁。初版は昭和16年12月5日、『現代叢書17 森鷗外』三笠書房。

萎縮腎ではなく、結核が鷗外の死因であったことが公表されるのは、その13年後のことである。石川淳がこの事実を知らなかったのは致し方ない。

しかし、鷗外は青年期から自らの体内に巣食い、じわじわと内から健康を蝕む結核の影を十分に自覚していた。霞亭の病萎縮腎は鷗外の表向きの死因である。『北條霞亭』に先だって新聞紙上に連載された『伊澤蘭軒』では、柏軒がこの病を得て、京都に客死する。

十五日より病は革になつた。當時治療に任じた醫家五人が連署して江戸に送つた報告書を此に抄出する。十五日後。「小腹御硬満、時々滴々と二勺不足位之御便通有之、尤竹筒相用候程之は通じ無之、始終袱紗にてしめし取申候。御食氣更に不被爲在、氷餅之湯少々づつ強て差上候而已。」

十七日朝。「翌曉迄二勺不足之は通じ十一度有之、其間多分御昏睡。」

十八日。「御疲勞相慕、始終御昏睡、御小水は通じ日之内六度、夜に入り七度被爲在。」

十九日。「七時半時頃より御呼吸御短促に被爲成、卯之上刻御差重被遊候。」柏軒は遂に五十四歳にして歿したのである。

此記事はわたくしをして柏軒が萎縮腎より來た尿閉に死したことを推測せしめる。¹⁴

人工透析のなかった時代、萎縮腎は、ありふれた死に至る病であった。

萎縮腎による死のモチーフは、鷗外の作中で何度か繰り返されている。鷗外が『北條霞亭』で狙っていたのは、読者の意表を衝く、作品による死因偽装だったのではないか。なるほど鷗外先生は萎縮腎に苦しみ、医師だからそれが避け得ぬ死をもたらすことを自覚しつつ、死を見つめながら亡くなったので、あんなにも霞亭を気にかけてのか。世間がそう納得してくれさえすれば、当時忌み嫌われた感染症、結核による死という逃れられない事実から、自分の築いた名誉も、遺された家族も守られる。痰を吐いた紙は別にして庭で燃やして、不十分ながらも家庭内感染を避けようとした鷗外が、文字通りの死力を尽くした仕掛けが、『北條霞亭』の「萎縮腎による死亡」なのだ。

それでも、結核との長い負け戦の間に、鷗外は目を結核を病んだ人に留めることは少なくなかった。ひたひたと迫ってくる結核による死の恐怖が、鷗外に結核から目を逸らさせない訳にはいかなかったのかも知れない。ただ、それは、注意深く切り取られ、なるべく目立たぬ形で作品の中に現れる。たとえば、本来であれば、鷗外の目指したいいわゆる「史伝」の主人公にふさわしい、考証学者で幕府医官だった小島寶素父子の伝『小嶋寶素』に、鷗外はあまり紙数を割いてはいない。連載に先立って、鷗外は次のように語っている。

小島寶素の如きは、わたくしは既にその事蹟を窮めらるる限窮めてゐる。此人の事は全く世に知られてゐぬと云つても好い。それゆゑわたくしは既に知り得たところを

14 『伊澤蘭軒』その三百二十。

棄て去るに忍びない。早晚書いて見ようと思ふ。只餘り人に迷惑がられぬやうに短く書くにはどうしたら好からうかと工夫している¹⁵。

それでも、寶素の嗣子尚真、字は抱沖、号は春沂の死因については、はっきりと記すのである。

安政四年閏五月八日に抱沖は歿した。年を饗くること僅に二十九であつた。是より先抱沖の病に罹ったのは三月の半であつたらしい。聞く所に據れば、病は痔漏を以て起つた肺癆であつた¹⁶。

「聞く所に據れば」とあるのは、恐らく、鷗外が小島家の伝を立てるに当たり、聞き合わせをした塙家からの情報だろう。寶素の二子は二人とも塙保己一の孫女を妻とした。鷗外は塙家の子孫塙忠韶に小島父子について問い合わせている。残念ながら、塙家から鷗外に宛てられた手紙の内、尚真の死の事情を記したものは残っていない。尚真が早世した後、順養子となり跡を継いだのは弟尚綱、字は瞻淇、号は春澳だったが、明治13年に亡くなったとき、嗣子杲一はまだ学齡にも達しない幼子であつた。鷗外は、大正4～6年当時北海道室蘭にあつた杲一にも手紙で問い合わせているが、物心がつくかつかないかの子どもだつた杲一が伯父や父の死の事情を知らなかつたとしてもやむを得まい。

しかし、公文書を閲すると、小島尚綱の死因は明らかである。

肺病ニ罹リ本月死去候處

(明治十三年十二月十五日 故内務省地理局雇小島尚綱ニ祭案料ヲ下賜ス 内務省伺)

とある。鷗外がこの事実を知っていたかどうかは、作品からは窺えないものの、当時の結核患者とその家族への差別を考慮して、鷗外が死因を伏せた可能性はないとは言えない。安政4年に亡くなった兄尚真の死因が分かつていて、それよりは最近の明治13年に死んだ尚綱の死因は分からないというもおかしな話ではないか。『小嶋寶素』は新聞紙上に連載された。新聞小説の持つ特質、すなわち同時性と読者層の広さという性格上、現在生きている子孫の生活や名誉を鷗外の筆が損なわないよう、一定程度の配慮は必要だつた筈である。

3 鷗外の蔵書

幕末、江戸医学館で展開された考証学に逢着した鷗外は、果たしてどの程度、考証学に

15 「觀潮樓閑話」一、鈴木春浦筆授、大正6年10月1日、『帝國文學』23ノ10。

16 『小嶋寶素』その十二。

ついて理解していたのか。そのことを解明するには、鷗外の旧蔵書について知る必要がある。

鷗外の蔵書の多くは、東大の総合図書館に「鷗外文庫」として収められている。鷗外文庫が作られたいきさつを、当時東大附属図書館に勤務していた、森茉莉の最初の夫である山田珠樹が記している。

鷗外森林太郎氏の蔵書は死後嗣子於菟氏の手から東京帝國大學附屬圖書館に寄贈された。圖書館は内規によって、この寄贈圖書を一纏めに別置せず、圖書の種類に従って、書庫内に別れ別れに収めてしまった。ただその時和漢書及洋書各一冊の目録を作って、寄贈圖書の内容を一纏めに知る便宜を計り、その和漢書目録に『鷗外文庫目録和漢書之部』と題した。鷗外氏自身も鷗外文庫と云ふ名称を用ひたことはないやうであるし、今云った如く、大學圖書館にもそのものは實在せず、ただ當時館内でこの寄贈圖書を鷗外文庫と通稱してゐたのによつたのである。因みにこの目録洋書の部には『森林太郎博士藏書外國圖書著者名目録』といふ獨逸文が題してある。この小文の題に用ひた鷗外文庫といふ¹⁷のも、全くこれと同じ意味をもつものであることを先づ斷つて置く必要があると思ふ。

すなわち「鷗外文庫」の呼称は、最初は鷗外蔵書の内、和漢書をまとめた目録に付された仮称だった。現在は、すべての書物が「鷗外文庫」の名の下に整理されている。

鷗外の生前、森家の蔵書は次のように配置されていた。

所謂鷗外文庫の寄贈について語る前に寄贈前の蔵書の状態を云って置く方が便利であらう。

鷗外氏が死去された當時、即ち大正末年頃には、氏の蔵書は凡そ三箇所に分置してあった。

その一は觀潮樓附屬の土藏である。崖上の道に添って建てられた日本式の土藏であった。(略)階下には国文及漢文の書類があった。主として文學書らしかった。本箱には一々分類目を書いた紙片がついてゐたから、すぐ内容がわかった。入口の左側の階段及一つの窓を除く三方に硝子戸付の書棚があり、中央には日本式の本箱が幾つか並べてあった。更に支那の史書を入れた塗物の支那式本箱もここに重ねてあったかと思ふ。階上は獨逸文學、史書、地誌、哲學、美術書其の他であった。『スバル』等鷗外氏關係の雑誌の揃物が日本式本棚に入れて置いてあったのも階上であつたらう。(略)

その二は觀潮樓の母屋である。(略)書齋は南面した六疊で、南北の一間半には廊下があり、東側の壁二間膳部には白木の本棚が造りつけられ、これには主として説文

17 山田珠樹「鷗外文庫寄贈顛末」『小展望』六興出版、昭和17年、275-83頁。

関係の漢書が入れられ、下段だけにブロックハウス百科辞典が入れてあった。西側の一間は硝子戸の入った本棚になってゐてこれには何が入つてゐたか忘れたが大藏經のやうに記憶する。残りの一間は戸棚で、ここに鷗外氏のあらゆる著作で出版されたものが一冊づつ納めてあり、新聞の切抜を紙に貼ったものもあった。北の廊下への出入口の上に棚があつて、フランス近代の論説物及社會科學關係の書物が積まれてあつた。洋間には獨逸文學の現代ものその他歐洲現代文學の獨譯が入つてゐた。玄關には雜書、三疊には現代詩歌書、廊下には武鑑を一杯積んだ書棚があつた。(略)

第三の置場所は房州日在の別荘で、ここの居間とも云へる部屋の戸棚のなかに明治文學のものが入つてゐた。これは昔合評會の材料となつたものであらう。單行本のものもあるし、雜誌から抜いて來て別に製本したものもあった。別に離れのやうな部屋の一方が全部書棚になってゐて、半分には帙入りの大藏經が入れられ、半分には近代獨逸文學を主とした歐洲文學のものが入つてゐた。

外に醫學關係のもの及辭典がいくらか、觀潮樓の廊下續きの別棟の於菟氏の住ひにあつたやうだ。しかし醫學關係書は多く陸軍を退く時軍醫學校に寄贈されたといふ事¹⁸であつた。

ということであり、大正5年に陸軍を退官したときに、医学關係のもの多くは、軍医學校に寄贈された。その代わりというわけではないのだろうが、退官記念に鷗外は、希望した漢籍を贈られている。このことについては、後に述べる。

鷗外死去当時、長男於菟も長女茉莉もその夫山田珠樹もヨーロッパ留学中だった。山田珠樹が先に帰国したが、その直後に関東大震災が起き、東大附属図書館の書物は烏有に帰した。觀潮樓は火災を免れ、於菟の帰国を待つて鷗外の蔵書は処分されることとなる。鷗外の「遺言」では、蔵書は三分される予定だったが、山田珠樹は震災によって蔵書のほとんどを失つた東大附属図書館への寄贈を提案した。

於菟氏が歸朝さるるや私はすぐこの蔵書処分について私案を提出した。當時私が關係してゐた東京帝國大學の附属圖書館が大震災により蔵書七十三萬卷と共に焼失し、寄贈に購入に鋭意蔵書の復興を計りつつあつた。私は鷗外氏の蔵書全部を纏めてこの圖書館に寄贈しようと提案したのであつた。その理由は故人の愛讀書が分散するのは惜しいことであり、我々の子孫が果たして完全に保存しうるか保證は出来ないし、又故人の蔵書は各方面に互つてゐるところに特別の意義があるのだから之を分けては意義がなくなるといふのであつた。幸ひに於菟氏及吉田氏の賛成を得た。未亡人は反對された。故人の意思を無視し、又纏めて寄贈することは利用率から云つて分配した場合より低いといふことが理由であつた。然しその詳しいことは忘れたが、幸ひに未亡人の承諾をうることに成功した。未亡人は他人の手に渡るなら買つて貰ふ方がよいと

18 山田珠樹「鷗外文庫寄贈顛末」。

云はれたが、これは我々が反対した。

寄贈のことは大學側の内諾も得たので、早速図書館に本が運びこまれた。(略)

ここに記しておく必要のあるのは、図書館に此の時運ばれたものは、鷗外家にあった前述の圖書全部ではなかった。觀潮樓にあったものでは、當時全集編纂のためといふので與謝野寛氏の許にあった鷗外氏の著述、切抜、雑誌、及於菟氏外遺児たちの手許に保存された辭書類、雑誌、一部の現代文學ものが除かれた。又日在の別荘にあったもののうち、明治文學ものは鷗外氏生前の約束があった由で、未亡人の妹山口夫人の許に送られたといふことであった。そしてこれらその時寄贈に漏れたものは、其の後私が図書館から離れた昭和八年頃までには図書館に來なかった。

圖書目録の編纂には数年かかり、その出来上ったのは、大學の新図書館が竣工して、そこに移轉した後であった。ここで始めて寄贈の手續が履まれた。(略) 鷗外文庫の場合に限り、於菟氏の希望によって、新たに中村不折氏に依頼して書いて貰った「鷗外藏書」の四字を彫らせた石印を作り、これを寄贈書全部に捺して、これで寄贈印に代へることとした。(略) 因みに、鷗外氏はそれまで「森氏之印」「醫學士森林太郎藏書」といふ判より用ひて居られなかったやうである。この「醫學士云々」の文字について鷗外氏に生前に質したところ、二十歳にならないうちに醫學士になったのでうれしくてこの判をつくって、藏書に捺したと云ふことであった。さればこの藏書印のある本は氏の藏書のうちでは古いものであると認めることが出来る。¹⁹

現鷗外文庫本には「鷗外藏書」の印が捺された。その内、「醫學士森林太郎藏書」の印があるものは、鷗外が医学部卒業後に購入した、比較的初期の藏書である。

「鷗外文庫」には、貴重書は少なく、端本が多い。

ただ二つばかり書いて置きたいことがある。その一つはこの文庫に所謂貴重本の少いことである。これは案外とする人が多いらしく、その原因として、貴重本は寄贈書から取り除かれたのであらうと云ふ誤った推察を下した人もあった。古いことは知らないが、私の知ってゐる大正中葉以後には少くも貴重書は藏書になかった。鷗外氏はいつか毎月俸給のうちから二十圓宛を圖書費に充てたと云ふことを話されたことがあった。この高はかなり後まで變らなかつたやうである。これから考へれば氏の藏書には貰ったもの以外には貴重本はないことが納得出来る。實用品以外には手が及ばなかつたのである。しかも氏は假綴本は悉く装幀をした上で讀んだので(數多いレクラム叢書が悉く氏の手によって装幀してあつた)、その費用も決して少なくなかつた。

その二つはこの文庫にはかなり零本の多いことである。之は寄贈の時整理中にその係の人が既に屢々不満に感じたことである。この端本は鷗外氏の几帳面な性格とは相反するやうである。全く氏はその藏書を非常に大切に取扱はれてゐたのであるが、た

19 山田珠樹「鷗外文庫寄贈顛末」。

だ之を利用した人の中に還し忘れた人が多く、端本になったのであらう。²⁰

鷗外の蔵書で、貴重書と思われるものは、『澁江抽齋』連載中に毎日新聞から贈られた写本であらう。

いわゆる「史伝」執筆を退官後の筆すさびとすることを鷗外は早くから決めていた。恐らくその資料とするためだらう、全国の陸軍軍医から醸金を募って、鷗外へ希望した漢籍が贈られたのである。それらの書物には「解組丙申初／同僚貽此書」という蔵書印が捺されている。残念ながら東大 OPAC には、蔵書印の情報までは取られておらず、退官時にまとめて贈られた漢籍が何かがわからない。東大総合図書館に問い合わせたところ、鷗外に贈られた漢籍は「8 点、199 冊」だったが、これまでにその内容を精査したものはない、との回答を得た。

鷗外は、漢籍を系統的に集めたことはない。鷗外の日記を閲すると、陸軍退官以前に購入した漢籍は、俗書の類が多く、鷗外が目論んでいた、江戸医学館関係者の事蹟を究明するにはまるで役に立たない。鷗外文庫の漢籍を見ると、勉強に必要な最低限の書物は揃っているようなのだが、東大では上記のように蔵書印等の精査をしていないので、現物に当たらないと購入時期等はわからないのである。

そのような制限はあるのだが、鷗外が江戸医学館の考証学者たちの伝記を書くつもりだった割には、準備がおろそかだったことを示す書簡がある。書誌学の勉強をするのであれば、この当時、まずは『経籍訪古志』は便利なガイドブックである。鷗外は、『澁江抽齋』で次のように記す。

抽齋は現に広く世間に知られている人物ではない。偶少数の人が知っているのは、それは『経籍訪古志』の著者の一人として知っているのである。(略)

然らば世に多少知られている『経籍訪古志』はどうであるか。これは抽齋の考證學の方面を代表すべき著述で、森枳園と分擔して書いたものであるが、これを上梓することは出来なかった。そのうち支那公使館にいた楊守敬がその寫本を手に入れ、それを姚子梁が公使徐承祖に見せたので、徐承祖が序文を書いて刊行させることになった。その時幸に森がまだ生存して²¹いて、校正したのである。

鷗外のいう徐承祖の序には「大清光緒十一年歲在旃蒙作噩病月上澣」の紀年がある。これはすなわち明治 18 年（1885）乙酉旧曆 3 月上旬に当たる。

この『経籍訪古志』を鷗外が入手したのは、『澁江抽齋』執筆を準備し始めてからだだった。大正 4 年 11 月 16 日に、抽齋の嗣子である澁江保宛に

20 山田珠樹「鷗外文庫寄贈顛末」。

21 『澁江抽齋』その二。

二白、經籍訪古誌、當地ニテ買求候。²²

と書き送っているのだが、これでは、鷗外には書誌学の基礎がなかったと自分で告白しているようなものだ。武鑑集めを始めて逢着した澁江抽齋の伝を書くのはよいのだが、鷗外の学識は到底、江戸医学館の考証学を記すには不足していた。そのため『澁江抽齋』でも『伊澤蘭軒』でも、江戸医学館で日々行われていた具体的な考証学の姿がさっぱり浮かび上がってこないのである。それでも、新聞社に約束した以上、毎日なにかしかの量の原稿は渡さなければならない。

幸いにも、『澁江抽齋』執筆時には、澁江保が大いに働いた。鷗外文庫に残る、澁江保自筆の資料類は、鷗外の『澁江抽齋』を豊かに肉付けするのに役に立った。鷗外は、澁江保の目で、抽齋を見、それを取捨選択して、文飾を加えればよかったのである。

ところが『伊澤蘭軒』ではそれは成功しなかった。澁江保のような、優秀なインフォーマントは現れなかった。文章は生彩を失い、蘭軒一家の考証学の業績は、まとまりを欠きばらばらに扱われた。恐らくは、鷗外は蘭軒一家の考証学の内容と意味を、きちんと理解していなかったのだろう。そのため、『伊澤蘭軒』末尾では、鷗外は次のような言い訳をしなくてはならなくなった。

わたくしは伊澤蘭軒の事蹟を叙して其子孫に及び、最後に今茲丁巳に現存せる後裔を數へた。わたくしは前に蘭軒を叙し畢つた時、これに論贊を附せなかつた如くに、今叙述全く終つた後も、復總評のために辭を費さぬであらう。是はわたくしの自ら擇んだ所の傳記の體例が、然ることを期せずして自ら然らしむるのである。

わたくしは筆を行ふに當つて事實を傳ふことを專にし、努て敘事の想像に涉ることを避けた。客觀の上に立脚することを欲して、復主觀を縦まゝにすることを欲せなかつた。その或は體例に背きたるが如き迹あるものは、事實に缺陷あるが故に想像を藉りて補填し、客觀の及ばざる所あるが故に主觀を倩つて充足したに過ぎない。若し今事の傳ふべきを傳へ畢つて、言讚評に互ることを敢てしたならば、是は想像の馳騁、主觀の放肆を免れざる事となるであらう。わたくしは斷乎としてこれを斥ける。²³

澁江保がいかに力があつたか、その労を思うべきであろう。もっとも、鷗外がそれほど感謝していたかは不明だ。

22 『鷗外全集』第26巻、364頁。

23 『伊澤蘭軒』その三百六十九。なお、『伊澤蘭軒』中、『中藏經』校訂について、鷗外が理解していなかったことは、拙論「調査報告 雲南香港訪書録一九九一—二〇〇〇」『中国に伝存の日本関係典籍と文化財』（国際研究集会報告書17）、国際日本文化研究センター、2002年、221-33頁で言及している。

4 鷗外の考証学

さて、逍遙が追悼文で完成しなかったことを惜しんだ鷗外の「新時代式の考証學的のもの」とはどのようなものだったか。そのヒントは、東大の鷗外文庫にある。

『澁江抽齋』の後も、鷗外は澁江保を手足のごとくに使って、資料を集めさせている。

集めた資料を基に、鷗外は、関連する人物を抜き出す作業を行った。たとえば、『小嶋寶素』の基礎資料である、小島尚綱『日新録』からは、わずか3年に満たない日記に登場する驚くべき多数の人名を抄出している。ただし、この作業の成果は、ほとんどと言っていいほど、作品には利用されなかった。ほかにも『國史之研究抄』など、鷗外が興味を引いた書籍から、人名や事項などを抜き出したノートが鷗外文庫には残されている。いわゆる「史伝」を書く間に、鷗外は、江戸医学館周辺の考証学者たちの仕事を垣間見、そこから考証学のまねごとを始めた。

いわゆる「史伝」からゆるやかに撤退した鷗外は、帝室博物館総長兼図書頭という地位を利用して、知人の研究のために資料利用の便を図ると共に、博物館に登庁すると、毎日、蔵書の解題と蔵書に関わる人々のメモを作成した。これが、現在、『鷗外全集』第20巻に収められている『帝室博物館書目解題』『帝室博物館蔵書人名抄』の一部となった。東京国立博物館には、未刊の『帝室博物館書目解題』『帝室博物館蔵書人名抄』原稿が残されている。そして、図書寮頭として編纂したものでは、歴代天皇号に関する考証を収める『帝諡考』、未完に終わり、吉田増蔵の手で完成された『元號考』がある。

結核に体を蝕まれた鷗外が、最後まで続けたのは、こうした考証学の仕事だった。

24 『小嶋瞻淇日新録人名』東大鷗外文庫。